

濃姫朱夏



(濃姫春秋・番外編)

山本恵以子

始まりの章

『信長公記』に ただ一人の女性名が記（しる）された。

“道三が息女 尾州へ呼び取り候ひき”

そして信長の最期のことばとして

“女はくるしからず”

ここから、
物語は 始まった。

諏訪湖 湖畔に小さな 美術館がある。

その一室に私は居る。

諏訪大社の御柱や紅葉の季節は、この美術館も賑わうが、近年 とみに経営が思わしくなく、それも展示室が少ないため新館を増設したことも一因だが、入館料が馬鹿高い。

高い入館料が、さらに来訪者を遠ざける。

ネットの世界だ、何もわざわざ費用をかけずとも、検索すれば“生”でなくとも、

ここの展示物なんぞ絵葉書でも、リトグラフでも観れる。

どっと、賑わう時は観光バスの到着日かTVの旅番組で取り上げられた時くらいだ。

やれやれと思う。

館長の意向か、展示室より、正面に陣取ったお土産コーナーに直行する 輩 も多い。

ついでに、お土産も売りのオルゴールも馬鹿高い。

それも経営難打破のためか？

本末転倒だ、手ごろな価格にすれば、倍も売れるのに。（私には商人の血が流れている）

見学相手が目指すは、いつも“常設されている、ここのお宝の山口華陽の青柿か、秋晴”だ。

私だって“山口華陽”の血を引いているのに。

大学生風の娘さんが 立ち止まる。

説明書きを読んでいる、オイオイ、まず ヒロインを見なさいなでしようが。

いつ、どこで、誰が、何を、どう描いたかより

まずは、真っ白な心で、対象を見なさいな。

何故に、説明を求め、それから 本物 見るのですか？

自分の鑑賞力にそんなに自信がないのかしら？

あら、もう 行ってしまおうの、ああ そうよね 集合時間に間に合わなくなる。

地方の美術館巡りに、時間を気にするのって それこそ、何しに来たのかしら？

外国なら解るわよ、お一人様では迷子になるし、言葉も通じない。

でも、ここは日本よ。諏訪湖、インター使えば、都心からでも半日の行程。

本当に見たいなら、根性込めろよなと思う。

あら・・・なんか、根性ありそうな おばはんが 私を見つめている。

女の子の陰にいて、気がつかなかったわ

あら、射る様に私を見ている。

マジ？固まっているわよ、この人。

私は少し、まなざしを正面から避けているの、見られるより、見る方が好きだから。

その目線の先に、このおばはん、立ちはだかった。

久しぶりだわ、ああ、ぞくっとする、貴女は、私に何を思い出したいの？

何を求めているの？

根性あるわね、既に三十分、微動だにしない。

後ろの職員が不審気に、おばはん見てる。

そう彼はガードマン、人件費節約で交代に職員が不当な行為をする、盗難とか傷つけるとか、

それ見張っている。座ってただ、見張っている風情でOK、まあ神社の阿吽像ね。

やっぱり、思い違いだったわ、行っちゃった。

どこか冴えない旦那さんに呼ばれたみたい。

はいはい、“青柿”は黒猫さんです。その先が“秋晴”です。

あら、根性おばはん、戻ってきた。

上着脱いでる。

もしかして、ひょっとして、真剣勝負？

受けて立とうじゃないの。

本当に 久しぶり。

私は今も、“真剣”とか“信念”に弱い部分があるのよ 興味持ってしまうの あなたが私のまなざしに見入っている

間に、私は貴女のこれまでの人生を覗けるのよ。

旅行が好きなのね、セーヌ河の岸辺、一人で歩いてる、心臓バクバク、フランス語が出来ないんだ。

目指すはマリーアントワネットの投獄されたコンシェルジュリーを探しているんだけど、フランス人て案外冷たいし、案内下手なのね。

日本では、福島原発壊滅被害のニュースが世界中に流されていた時期。

あっその前に、タージマハールへ行ってる。

“天空の城ラピュタ”のモデルの城となったアンペール城を、キャアキャア言いながら、像の背に乗っている。

あら、やるじゃん。

今度はエーゲ海かしら、白い家の重なり、まあ、ロバに乗って島巡りしている。

前に行く、同僚らしき方が半分、お尻が鞍からずり落ちかかっているのに、大笑いしている。

おばはん、乗馬の経験あるらしく、余裕で、両足、鞍の上に挙げ、完全にリラックス。

今度は、ハロン湾～ふーん、“rui”の歌、ウォークマンで聞きながら、船首で風 受けている。

添乗員さんが、一人参加なので、寂しそうと気を使っている。

いいえ、全然ノンプログラム おばはん、もう歴史の流れにどっぷりつかり、満喫している。

いろんなこと考えている。何か、書いているみたい、旅行紀行ではない、現代がテーマでもない、行きずまっているみたい。ああ、それで、旅行か？

泣いている、雨のしづくに紛らわし、泣いている。

ワシントンDC、アーリントン墓地だわ、灯火が燃えている。

ああ、ここには随分若い頃、来たことがあるのね。

ふーん、今度はジャクリーンのお墓を。

そうだったのJFKが貴女の“青春の門”。

あら、日本だわ、京都？大徳寺総見院、えっ、もしかして？

そう、私にも覚えがある、そこは、あの猿太閤が、自らを織田政権の後継者と為すべく、策謀の限りを尽くし、天下掌握の企みを実行した、亡き主君信長の威光を借りた“盛大な一周忌”の舞台。

そうだった私は、

私は“山口華陽”が最晩年、描いた小品“白狐”だ。

いつも、いつでも、この小さな古びた常設の部屋に居る。

でも、私は自由に風のように、時を遡れる。

“白狐”だから“女狐”だから。

白面金毛・九尾の“玉藻の前”の伝説程ではないけど……

あれは阿部清明が騒ぎ過ぎたのよ、モデルは美副門院得子だと思っている。

気弱な祖父白河院に苛め抜かれた鳥羽院をたぶらかし、待賢門院珠子を追い落とし、位もないのに皇后に登った異例さに、狐の名が利用されただけ。

元はと言えば“孤独を恐れ、愛情に溺れ、運命に弄ばれた悲劇のヒロイン”に過ぎないのよ。

あらあらあら

久しぶりに、根性のあるおばはんと、歴史の旅に出かけようかしら？

もう、お気好きでしょうが 私を描いたのは、華陽さん。

日本画家で、最期の作品が私だったのよ。

寄贈され、ずっとこの美術館にいたの。

毎日、いろんな人が私の前を通過したの。魅入る人は、私に“思い”を残して行くの。それが蓄積され、私の周りに漂う。作品は作者の手を離れ、絵で言えば、サインが押されると、もう、独り立ちするの。

華陽さんが、私を生み出したけれど、赤子が生まれ成長する様に、

いつしか、私は私の“心”を持つに至ったの。

物にも、命はあるのよ。

人の、生あるものの心が添うのよ。

だから、刻々と変わっていく。

昨日の私と今日の私は、同じ“白狐”と題をつけられていても、全然、違うの。

昨日の私は今の私ではないの。

華陽さんが描いてくれた“まなざし”はそんな時を経て力を持つに至ったの。

私は好きな時に、ここから抜けだせることに気がついたのよ。

でも、ずーっと、そんな気にはならなかった。

久しぶりのよ、このおばはん、根性あるもん。

人はみかけによらないわね、まるで流れる雲のように、心が吸われていくの。

蒼穹に吸われていくの。

この人は、それを見たいと願っている。

もう消えてしまった時代での本当の事。

伝わらなかった、本当の事。信

じょうとしているけれど、外野が五月蠅いのよね。

でも、少し恐れている。

信じているけれど、外野の言うように、もしかして？と揺れている。

何度も打ち消しては、自分の直感を信じ直している。

そうね 外野連は、相当、凶太い。

私が惹かれたのは、ズタズタの心。

まるで自分が傷つけられ、汚されたように、この人は 何度も何度も落ち込んだのだ。

だから、惹かれた。

そんなに嘆くなら、本当の事を突き止めてあげるわ。

お濃・・・濃姫・・・帰蝶・・・道三息女・・・織田信長御台・・・信長正室・・・養華院殿・・・

わかったわ、見てきてあげる

遇ってきてあげる 貴女が夢見、求めている あこがれのお人に。

あら、私の思いがわかったのかしら

おばはん にとこり 笑った。

風は幾層にも吹く。時も同じ。過ぎ去った時も、今の時も、幾層にも別れている。

貴女の知りたいこと、貴女の願いを叶えてあげる

さあ、旅だつわ

行先は“戦国乱世”見届けましょう

消えて逝った真実を 本当の事を 見極める 旅へ

“白狐”は居ない。

絵の中には、ただ笹竹と、黄葉の重なりだけが。

もう、“朱夏”は、絵の中には 居なかった。

書かれたか、書かれなかったか？

残ったか、残らなかったか？

書かれ、残ったのは “信長公記”の“道三が息女 尾州へ呼び取り候ひき”と“おんなは苦しからず”

簡単だわ、

濃姫が、道三息女が何かを書いていれば、明白だわね

“白狐”はまだ 知らなかった。

よもや 自分が“朱夏”と呼ばれる、“濃姫”に繋がりがあろうとは？

幾重にも、風の層がある、風の道がある。

時にも、幾層もの流れがある、命にも、始まりと終わりがある。

終りが始まりに繋がる、ラビリンスの輪を、“白狐”は“朱夏”への道を 今 歩き始めた。

一の章 濃姫朱夏 “旅立ち、再び”

望郷

華麗な女輿の中、十四の蝮の道三が息女 帰蝶が 南蛮かるたをめくっている。

札は、何度も“不吉”を暗示する。

（おかしなこと。

昨日まで敵国であった、尾張・織田のうつけと評判高い、三郎信長様に政略のため 嫁ぐのに。

良い暗示の絵札なんぞ出るはずはないことなぞ最初からわかっていたのに）

明るさを求めたかった、蝮の娘と言われても、それでも少女の心は、未来に光のかけらを求めた。

（お父上様のお心使い）

輿の中には、尾張までの長旅を退屈しないように、見事な絵師の技で、花鳥風月が描かれている。

源氏物語の明石の須磨の別れも。

秋の風景、薄の横に、“白狐”がひっそりと描かれている。

こちらを、

帰蝶を見つめている。

（あら、いつか どこかで、お前を見たわ） 白狐は若い、女を連想させた。

「お前は女狐なの？」

しなやかな肢体、細い首、どこまでも白い毛の重なり。

首の周りに、見え隠れする
朱色の？ 紐？

ああ、あれは、あの方の茶せん鬘を結っておられた
朱い、紅い 紐。

ずっと、ずっと お守り袋に入れて、肌身離さず 持っていたのだ。
あのお方がやっと御迎えにお出で為された時。
そう、兵庫に頼み 私の墓に 茶毘に伏して、埋めてと頼んだ……

あら

でも、私はこれから 織田に輿入れする。
彼のお方を知っているはずは無い。
もう、“白狐”はいない。
薄の横には 須磨の海。波の重なりが続く。

私は十四の少女
父は美濃の国主 齊藤山城の守 入道道三
そして母様は、土岐明智氏の出、道三正室 小見の方。
私は正室腹の、唯一の、道三鍾愛の一の姫 帰蝶だ。

七十八歳の媪なぞではない、墓なぞ知らぬ、茶毘にふした、紅い紐なんぞ？
だが、確かに“白狐”は 居た。
ふいに、思い出した
そうだわ、あの女狐の名は
“朱夏”

私が生んだ、娘が 女御様が名付けた。
そうだ そうだった
突如 記憶が戻った、“朱夏”は、私だった。
私であったのだ。

そう、私は生前 織田信長公御台とか、上総介様御正室とか、安土殿とか呼ばれた。
確か、大徳寺に墓がある、兵庫が墓守として、守ってくれた。

でも、私は、私は 帰蝶よ！

奥の中の花鳥風月が、

ああ花が、鳥が 生きているように 揺らめく。

風が渡る、月が満ちる

帰蝶は、真横に、幾千もの時が過ぎて行くのを見るのであった。

私は、生まれ変わるのだわ

来世で、あの方をまた、追うのだわ

未来永劫の旅が、夢がまた 繰り広げられるのだわ

本能寺で、あの方が見れぬ、後の世を見んがため、生き残されたのだった。

そして、こたびは、“朱夏”となって、濃姫が見られなかった “娘達”の世をこの目で私自身が見るのだ。

十四の少女は、動悸を抑えつつ尾張への何度目かの、信長に出会う道を歩む

時を遡る、ラビリンスが、再び 始まったのだ。